

## 令和4年度全校朝礼6月【高校】

今年度の芸術鑑賞会は、卒業生が出演する、その頑張っている姿を見せたいという意図もあって劇団四季ミュージカルになりました。その卒業生は、本人曰く、何となく高校生活を送っていました。それが1年次、同級生が出演しているたミュージカル部公演を観て、一変します。すぐにミュージカル部に入部、3年次には主役も務めました。その後、大学の芸術学部に入り、演技の勉強、その後、劇団民芸に入り、舞台やテレビに出演、その後、劇団四季に入団し、現在に至ります。彼にとって國學院栃木のミュージカルとの出会いが人生を大きく変えたのです。

私もいくつもの出会いがあり、その時々で多かれ少なかれ影響を受けつつ、今まで生きてきました。今日はその中の1つの大きな出会いについて話します。それは遡ること40数年、大学の入学式の日のことです。式が終了して学部のオリエンテーションの席につきました。その時、隣りに座った学生が話しかけてきました。そのうち昼飯を食べようとなり、食べながら話しているうちに意気投合、その学生、名前は小川忠、それが彼とその後40年以上に渡る付き合いの始まりでした。

入学してから数日後のことでした。小川氏から自分が入ったサークルがあるから来てみないかという誘いがあったのです。サークル活動と言うと当時、未公認のものを含めると、200も300もあったので、決めかねていました。また、入学式の時からどのサークルも勧誘に必死で、歩くたびに声をかけられうんざりしていたのです。しかし、せっかく誘われたのだからということで、学生会館、部室が集まっている所へついて行きました。薄暗い階段を上がっていくと『英字新聞部 ワセダ ガーディアン』という看板。入ると何やら怪しい面々。まずは活動内容の説明でもしてくれるのかと思いきや、「ノートに名前と電話番号を書いて」と言われ、その通りにしたら、もう入部したという雰囲気、断るタイミングを逸してしまい、入部となりました。

発行している新聞の名前が『ワセダ ガーディアン』でした。それは留学生向けのもので、「International Friendship」を目標に掲げ、大学内の情報はもとより、日本の学生事情や時事問題に関することを載せていました。英字新聞部と言うと、一見アカデミックでスマートな感じがしますが、実際の活動そのものは、まさに「修行」でした。

まずは、英語の修行です。新聞製作の過程ですが、記事にする題材を探しては、記事を書いて上級生の編集委員に提出、何回も書き直しをさせられ、場合によってはボツになります。さらに通信社に務めているOBに最終チェックをしてもらって初めて記事になります。その後、一泊千円の貸し部屋で（四畳半に5、6人が入る）、少なくとも3日間ほぼ徹夜で、レイアウトや校正の作業、印刷所で最終校正をして発行となります。これが毎月続きます。

しかし、修行と言えば、何よりも5泊6日の合宿です。内容は、「ヴォイス・オブ・アメリカ」の放送を聴き、ディクテーション、それを記事に書き換える作業。また、留学帰りの先輩のインタビュー記事の作成、そして外へ出かけて行って記事になりそうなことを取材して記事にする。ある時、外国人別荘地域まで行って、不審に思われながらもインタビュー、事情を説明するまで一苦労でした。さらにタイプライターの練習です。現在のパソコンのワープロ機能など当時はありませんでしたから、いわゆる機械に向かい、肘から腕全体を動かし、力を入れて叩かないと文字がかすれてしまい、速さだけでなく力も要求され、慣れないうちは、指や背中の中の筋肉も傷みます。「昔は皆爪が割れるまで叩き、キイは血で赤く染まった」などと勝手なことを言う先輩もいました。それでもコンテストがあるために短い自由時間を使ってまでも練習に明け暮れました。そういう状況で、すべてが地獄の特訓、しかし、そこは意地とプライド、そして仲間との連帯感で乗り切ってきました。

次の修行です。新聞を発行するためにはもちろん費用が必要です。1部50円の売り上げでは、発行費用を稼ぐための活動も重要なことだったので。主な収入手段は2つ、まずは、広告取りです。ネクタイを締め、ブレザー姿になり、アポイントメントを取って担当の人に会わせてもらう。まだ、会ってくれるのはましな方で、ほぼ電話の段階で断られます。しかし、中にはお茶を出して話は聞いてくれたり、宣伝効果がほとんどないのを承知で広告を出してくれる大手銀行もありました。世間の厳しさ、温かさを知った経験でした。

もう1つは、大学の受験日に予想問題や有名人の卒業生のインタビュー記事（当時の村上春樹にもインタビューしていました）を載せた受験生特集号を作って手売りするというものでした。例の貸し部屋に泊り、朝5時に起きてテントを張り、凍えるような寒さの中、一日中足を棒にして受験生一人ひとりに声をかけ、1部500円で売りました。高額に思えますが、予備校と提携して、試験後にその新聞を持っている人には模範解答を渡すということで何とか売れました。しかし、多くは煙たがられながら「結構です」と断られます。しかし、それはましな方で、怪しい者であるかのように逃げ去られることもありました。こうした経験は、少しのことでは動じない心を育て、先ほどとは逆で、下手なプライドなど捨てれば何でもできることを学んだのです。

こうした修行の日々は、単に自分自身の成長だけではなく、辛い経験を共にしてきたからこそ仲間との絆が強まり、卒業後も彼らとの交流は続きます。小川氏はアメリカに留学した後、日本と諸外国の文化交流を促進するために設立された外務省所管の特殊法人である国際交流基金に就職。赴任地はインドネシア、そこで彼は彼自身が見たインドネシア事情をレポートした「ジャカルタ通信」を発行、それを毎月一度、手紙を添えて送って来ていました。これが後に、岩波新書『インドネシア — 多民族国家の模索』という本になって出版されます。その後、帰国して、勤務の傍ら、また退職後、大学の教員となって

も、アジア、特にイスラム諸国の事情通として多数の著書や新聞社への寄稿、大学の講義や講演を通し、アジアに関する様々な情報や意見を世の中に発信していったのです。その小川氏ですが、実は何度も本校を訪れています。最初は、教養講座、次は大学出張講義、7年前は創立記念講演会の講師として、本校生徒たちに向けて、国際文化交流の在り方から「民族とは、そして国とは何か」という問題まで、様々なテーマで熱く語ってくれました。

また、ガーディアンのメンバーの一人である佐久間弘展氏も本校に出張講義で2度ほど来てくれました。彼は、一度企業に就職しますが、半年後に退社、大学院でドイツ政治史を学びながら、夜は会話学校でドイツ語を学び、バカロレア奨学生試験に合格し、ドイツに留学。足掛け8年滞在。帰国後、いくつかの大学の講師を経て、早稲田大学の教授になりました。そして、また彼も2度、出張講義に来てくれたのです。その内容は、「ペストのヨーロッパに与えた影響、またそのことから見えるヨーロッパ人の死生観」。残念なことに13年前に病気で亡くなってしまいましたが、彼が生きていたら、今のコロナ禍をどう思うのでしょうか。

大学時代の彼らとの出会いは、私の軸となるものを形成しましたが、彼らの生き方、夢に向かって挑戦する姿勢、世界や日本を見つめる冷静な眼、そして世の中にどう貢献していくべきかという思いは、常に私に刺激を与え、私に大きな影響を与えてくれました。たまたま隣りに小川氏が座ったこと、それが私の人生を大きく左右することになるとは、本当に運命とは不思議です。偶然とは面白いものです。さらには、その出会いがこの國學院栃木と関わり、私のみならず、私の生徒たちにも関わり、何らかの影響を与えてくれたことに感慨深いものがあります。

人生というのは、人の縁で紡がれていくと聞いたことがあります、本当です。皆さんも、これから数えきれないほどの出会いがあると思いますが、その中で、自分の運命を大きく左右するような出会いが必ずあります（もしかすると既に出会っているかもしれませんが）。それを信じて毎日一所懸命に生きていきましょう。

ラグビー部の全国大会決勝戦の後、『ガーディアン』の先輩や同期からメールが送られてきましたが、小川氏のメールを最後に紹介します。

「感動する機会を与えてくれて感謝です。決勝戦は我が家総出で応援しました。新聞等で様々なエピソードを知り、あらためて國學院栃木高校の教育の素晴らしさを感じ入りました。『ガーディアン』の同窓会総会でも、今度こそぜひ話してほしいです。結果は本当に残念でしたが、負けることから学べることも多いし、胸を張って青木校長の待つ母校に帰ってほしいです。さらなる進化をフィフティーンに期待します」